

SMF
Press

SMFアート寺子屋 vol.1

考えられないことを
考えられるようになること(1)
逸脱する芸術表現

今年度の新企画、SMFアート寺子屋の第1回が9月29日、埼玉県立近代美術館講堂で開催されました。SMFが目指すアートプラットフォームとはいったいどのようなものなのかについて、活動開始から5年を経た今、もう一度原点に立ち返って考える機会を持つことがこのアート寺子屋の重要な目的の一つでもあります。今回は、アートを創り出すという行為が現在の社会とどのような結びつきを持っているのか、特に現代音楽などの先駆的芸術表現を念頭に模索し、イメージを共有できる場をつくることを目指しました。この日は先端芸術音楽創作学会との共催というSMF

初めての試みでした。私柴山拓郎、塩野衛子さん、星(柴)玲子さんによる研究発表に続き、『考えられないことを考えられるようになること(1)～逸脱する芸術表現』という、この日のテーマによるパネルディスカッションを、同学会会員の沼野雄司さん(音楽学)、古川聖さん(作曲家)、松村誠一郎さん(メディアアーティスト)、SMF運営委員の高橋博夫さん(俳人)と、ゲストとしてお迎えした美術評論家の伊藤俊治さんで行いました。

芸術表現が歴史とともに大きく変容を遂げてきたプロセスについて、パネ

ラーのそれぞれ独特の視点による解釈や意見交換がなされました。その中で特に印象的だったことは、先端的な芸術表現の「先端性」がある単一の方角を向いている流れの「先端」を指しているとは限らず、例えば手を広げた5本の指先はそれぞれ別の方向を向いていながらもそれぞれ先端である、という多様性を見失いがちではないだろうか、という視点を共有したことです。また、伊藤さんは、新たな芸術表現の「意味不明性」を、私たちが言語や意識を獲得する以前からの「神がかった」儀礼に伴う前音楽的行動の記憶として捉え、私たちがこれから獲得する新たな音楽が、実際には私たちが種としてかつて経験していた記憶の再



▲左から、高橋博夫さん、古川聖さん、沼野雄司さん、松村誠一郎さん、伊藤俊治さん、筆者

生である可能性を指摘するなど、人類学的な視点までも含んだ幅広い議論が展開しました。内容の濃さが、2時間という時間を感じさせないパネルディスカッションでした。(T.S.)

※この日の研究発表およびパネルディスカッション用の発表原稿は、先端芸術音楽学会ホームページ(<http://www.jssainfo/>)の「会誌」から、「第13回研究会会誌」をダウンロードしてお読みいただくことができます。

の
知恵
仮設

そろそろ世代を超えた長寿命の住宅が望まれているんだと政策、確かに、成長から持続へ、パラダイムシフトのまっただなかにある現代にあってはまっとうな考えかもしれない。しかし、ヘンな音楽をつくっている仲間(さらに彼は典型的なB型なのです)と一緒に企画していると、「一度っきりの人生、その時々、最も相応しい住まいで暮らしたいのも人情、だから住居は短寿命」と、素直な僕でもひねくれてものごとを見るようになっ

てしまった。そこでテーマは仮設の知恵。

仮設とは必要に応じてかりに設けること。必要が何らかの変化を受容するためならば、応じた仮設が生じる。震災などの受動的な変化には仮設住宅。ライフステージの変化のための改装や転居は次のステージまでの仮設かもしれないし、能動的なライフスタイルの変化にもこの風土の建築は木構法で応じてきた。11月25日、お話は内田祥哉さん。

ヘンなことをするアートの立場も、もしかするとそれによって日常に変化を引き起こす仮設ではないだろうか。蛇足だが仮設は仮設の正字である。(KM)

S A I T A M A
連携美術館情報

入間市博物館ALIT

アリティフェスタ2012 特別展
「茶の美探訪 アリティ茶道具名品選」11/1~12/9

「心の時代」を本展示の主軸にして、アリティ茶道具コレクションの名品の魅力をお届けします。

常設展示資料特別公開「アリティ浮世絵コレクションから〜お茶と浮世絵展示〜」10/24~12/9

特別展の実施に合わせ、館蔵浮世絵コレクション約200点の中から、代表的な作品19点を展示します。

うらわ美術館

「日本・オブジェ 1920-70年代 断章」11/17~2013/1/20

日本でのオブジェの登場と、それが美術とその周辺のさまざまな分野へと拡張してゆく様子を、主に1920年代から70年代を通して紹介します。

「コレクション展 描かれた『浦和』から」

11/17~2013/1/20

浦和近辺の風景を主テーマに、地域ゆかりの美術家の作品を「ぶらり・まち歩き」の趣向で展示します。

川越市立美術館

開館10周年・市制施行90周年記念特別展Ⅲ
「小江戸川越江戸絵画 職人尽絵と三十六歌仙」11/6~12/16

重要文化財、狩野吉信「職人尽絵」と岩佐又兵衛「三十六歌仙額」を中心に、川越にゆかりの深い近世絵画の数々の名品を一堂に公開します。

埼玉県立近代美術館

丸沼芸術の森所蔵「ベン・シャーン展

一線の魔術師」11/17~2013/1/14

「丸沼芸術の森」(埼玉県朝霞市)のコレクションから、近年新たに所蔵となった初公開の絵画・ドローイングを含むおよそ250点によって、ベン・シャーンの魅力を紹介していきます。

今回は、うらわ美術館をピックアップします。

11/17より開催中の「コレクション展 描かれた『浦和』から」には、地域ゆかりの作家が描いた『浦和』が、写真と地図とともに展示されています。「どの場所を描いた作品か?写真で見ると今はどんな様子か?など、なかなか面白い展示かと思えます。小中学生に見せたいです。」とは、教育普及担当の田島さんの談。作品をもとに、浦和のまちへの興味が深まりそうです。まちとの関係で思い出されるのは、今夏第一回を経た《アートでつなぐ人とまち アートフェスティバルうらわ2012》。美術館もワークショップを同時開催する形で協力し、知り合った者同士顔を合わせれば「次はこんなことをやりたいね。」と会話が弾むのだとか。新旧織り交ぜた『浦和』の魅力をアートで浮き彫りにしつつ、まちと美術館とが一緒に活気づいていけたら良いですね。およそ2ヶ月間の設備工事を終え、再スタートしたうらわ美術館。館内を照らすLEDの真新しい光の先には、どんな未来が開けていくのでしょうか。(A.O.)

SMFあぁと！ファクトリー

共鳴する空間 — 詩・美術・建築・音楽・ダンス —

芸術家コロニー

絵画や建築図面を中心とした展示は、SMFで行ってきたこれまでのプログラム（インスタレーションやワークショップ）とは異なる性質のものであり、また、「建築・音楽・ダンスのコラボレーション展示」との間に仕切壁を設けずに展示を行う計画としたので、上手くフィットしてくれるかどうか、実際に設営を行うまで心配でした。仕切壁を無くしたのは、SMFの活動にも通じる、立原道造の「芸術家コロニー」の



構想を感じられるような会場構成を目指したからです。

ダンボールでつくられた小さな空間群をたくさんの家とみ立てて、そこで繰り広げられるダンスや音楽、壁面の絵画によって「芸術

家コロニー」が感じられることを意図していました。

それを実現できたかどうかは分かりませんが、少なくとも、立原道造の椅子や建築模型といった立体物があつたことで、ダンボールによる空間群へと接続させることはできたように思います。特に、「椅子」という身体を思わせるものを、余白をもって空間の中央に置いたことで、立原道造の絵画で囲まれたスペースは、ダンボールによる空間群への「前庭」のような空間となりました。（S.S.）

かいじゅう、近代美術館に現れる！



9月より全5回で行われたダンスワークショップ、「かいじゅう街に現れる！」の参加者は、小学校に入る前の子から高校生まで、個性溢れる素晴らしい子供達。「ダンボールで作る秘密基地」に魅せられてか、多くの元気な子供達が集まってくれました。

ワークショップ

ワークスは毎回準備体操から始まります。講師を務めたダンスグループ「転々」のオリジナル体操です。音楽に合わせて楽しみながら体操します。少し体がほぐれたら、作品の創作&練習です。作品の中には子供が自分達で創作したダンスシーンもあり、そこにはそれぞれが考えたオリジナル怪物が登場します。組体操のように逆立ちをしながら歩いたり、尻尾を持って繋



がったり、回しながらリフトをしたり…子供達の自由な発想はどんどん膨らみ、作品の見どころとなりました。

また、ダンボールの秘密基地を壊すシーンでは、本物の恐竜さながら豪快に潰したり破ったり。ペしゃんこに潰れたダンボールの中でのダンスも、なかなか見応えのある面白い景色でした。

今回、一番強く感じた事は、子供達はものづくりの天才であるという事。これからも自由ににその芽を伸ばしていってほしいなと思います。（H.M.）

詩と美術の共鳴する空間へ
SMFあぁと！ファクトリーに参加して

作家は一般的には自分のテーマと作風を追求します。今回のように詩にインスピレーションを得て作品を制作というのは応用編、変化球でしょう。しかし、音楽は詩とともにあることは珍しくないし、詩画集、詩写真なども巷では見られます。

詩は言葉の彫刻です。そこには小説などと異なる抽象性があり、他の領域と結ぶ場合、その挿絵や解説のような缺

欠関係に陥る怖れがあります。それを避けるには、相手と対峙する理解とスタンスが必要でそれがまずおもしろくもあり、なかなか大変でもありました。

鑑賞する側からみると、詩の視覚化という絵手紙のような素直な見方と、美術作家がいかにか詩人と向き合ったかを見極める裁判官のような見方があるでしょう。その意味においては美術作家は被

告席に立たされています。窃盗でも無視でもなく、辱めることなく、互いに尊重し互したという正統性を主張しなければなりません。

美術家は試されたのです。この展示のもう一つの面白さと困難さはここにあ



ると痛切に感じました。

グルグルハウス 白濱雅也

「きたうらワン」デビュー！

生憎の雨模様でしたが10月28日「きたうらワン」は、デビューしました。

きたうらワンとは、2011年に行われた「北浦和西口銀座商店街アート化計画」の中から生まれた商店街のマスコットキャラクターです。今回、商店街の方々の声に応えるかたちでワークショップが開始しました。

具体的には埼玉大学の学生が作った「きたうらワン」のぬいぐるみといっしょにカメラを持って商店街のステキを探しに行き、画像に収めて互いに紹介し合う活動です。

商店街には様々なステキがあります。街並みや、店さ

ん、そして商品など、人に紹介したくなれば何でもアリとしたところ、いろいろな画像が届けました。商品棚に紛れ込んでいたり、お店の人とおしゃべりしたりなど、自然と街に溶け込む「きたうらワン」がいる一方、犬ならではの視点で得意げに路地のタイルを紹介する「きたうらワン」もいました。

活動を終えて感じることは「きたうらワン」というキャラクターが意外と認知されているということでした。これから街の人々が「きたうらワン」にどんな物語を与えてくれるのがとても楽しみです。（S.I.）



▲商品棚に紛れ込む「きたうらワン」